新しい生活

　今日は六月十日です。久しぶりに雨の朝となりました。もう梅雨入りです。

新型コロナウイルスの影響で、オリンピック、パラリンピック始め、いろいろな催しが中止となり、経済活動も自粛され、世の中の様子がずいぶんと変わりました。半年前には想像もしなかったことです。五月十日に予定されていた大石法夫先生の十三回忌法要も中止となりました。全国からお集まりになる同行様たちのことを思われて、ご長男の一朗様から早い段階で中止の連絡が入りました。私たちは大石先生との出遇いを振り返って、一文を寄稿させていただき、先生の御遺徳を偲ばせて頂きました。住職が毎月出かけていた富山県高岡市の超願寺様での定例法座も、四月、五月、六月の三か月、お休みとなりましたし、その他の予定していた法要も中止となりました。長仁寺では、毎月二十八日に開いている聞法会『聞光道』は三密に気をつけながら、休まず開かせて頂きました。婦人会はお休みしました。ご法事やお月忌参りは、中止や延期されるところが何軒かありました。月参りは、感染に配慮してお休みして下さいと言われるところもあれば、まったく気にせず、お参りして下さいと言われるお宅など、さまざまですから、其処此処に応じて対応させて頂いております。

私たちは四月十四日に、本堂南側の住居から北側の古い庫裏へと引っ越しました。一月の報恩講が終わり準備を始め、毎日少しずつダンボールに荷物を詰めていきました。同じ敷地内への引っ越しであっても、一応荷物はすべてダンボールに詰めなければなりません。引っ越しが決ったときは、これを機に断捨離するつもりでしたが、コロナ騒動が起こると考えが変わりました。断捨離というのは、経済活動が順調に運ばれているときの発想でした。今後耐久生活が予想される中では、今あるどんな物も無駄にはできないという考えに変わり、処分しようと袋に入れていたものを、再度ダンボールに詰めなおしました。緊急事態宣言が発動される直前で、引っ越し業者は来てくれました。コロナ騒動の始まる前に家のリフォームを計画し、工事に入っていたおかげで、資材も調達でき、予定通り完成することができましたが、もし、コロナが少しでも早い時期に流行していたら、とてもリフォームを思い立つことはできなかったと思います。予定通り、リフォームも引っ越しも済ませることができ、スムーズに移動ができました。トントンと事が運び、「千里の竹やぶを三尺の杖を持って、どの竹にも当たらずに走り抜けることができる」というお譬えが思い出されました。私たちの考えでなく、何か大きな力で運ばれているような感じを受けた一連の作業でした。

古かった庫裏はリフォームのお陰で想像以上に素晴らしく生れ変わりました。ご門徒の大工さん廣池隆さんがよく工夫して下さり、新しく蘇らせて下さいました。壊したところの古材のまだ使えそうなものは、人目に付かないところで再利用するなど、無駄の無いよう手間のかかる仕事を率先して下さいました。太い梁がむき出しになった難しい造りの家を、それこそ神業で驚くほど素敵な部屋に変身させて下さいました。お風呂やトイレ、台所の水回りは新調です。納戸は畳を床に変えて頂き、壁は私も手伝い、住職と二人で紙を貼って補修しました。奥座敷とお内仏の部屋はそのままです。玄関は新しく取り換え、縁側のサッシも新しくして廊下の板を張り替えると、古さと新しさがマッチしてとてもいい雰囲気になりました。床が落ちて使用できなかった奥座敷のトイレは予算オーバーになりましたが、思い切ってやり替えて頂きました。

これまで住んでいた南側の住まいに、私たちは六年間住まわせて頂きました。そこは前坊守が隠居所として建てた家です。義父も義母もこの世を去り、私たちは隠居はしませんが、ずっと死ぬまで住まわせて頂くのだろうと思っておりました。ところが思いがけず、また古い庫裏へ移動することになりました。今月二十七日には、長男一家がアパートを引き上げ、私たちが明け渡した所へ引っ越してきます。いよいよ同居生活がはじまり、住職交代の準備が始まります。

ご門徒様には、始め古い庫裏へ長男家族が住むと発表しておりました。その計画が変更し、住職坊守の方が再び庫裏へ戻りました。この秋に住職継承が決り、一度は、世話人会議を開いていただいて、古い庫裏を改築し、長男家族が住めるようにというご相談をさせていただきました。ご門徒様の了承を得て、建築士さんをお願いし、家の調査をして図面を描いていただいたり、ローンを組む計画も立てられました。ところがその作業を進めるうちに、私たちの方が古い庫裏へ引っ越しする方が、現実的に進めやすいのではと変化して参りました。ご門徒様方のお考え、建築士さんの提案、住職坊守、副住職若坊守四人の考え、それぞれに思いがあります。そのときはまだコロナの騒動は始まっていませんでしたが、このご時世、だれも先行きが見通せないお寺の事情を考えると、できるだけ経費は少なく、ローンを組まずに済む方法を考えるようになりました。それによって様々なややこしい手続きも不要になりました。私たち住職坊守が、残りの人生を住める程度に、古い庫裏を最低限リフォームさせて頂くことになりました。世話人会議でご紹介した改築工事の内容は大幅に縮小されました。使用不可になっていた水回りの修理を重点としたリフォームが計画され、ご門徒の大工さん廣池隆さんに工事の一切をお任せしました。工事は昨年の十二月末から始まりました。

私たちは京都に住んでいた時からいろいろな先生を訪ね、子連れで泊めていただいたりもし、手厚くお念仏の教えに育てられて参りました。これからは私たちが今まで頂いてきたご恩をお返しして行かねばと思っております。ですから、教えを求める方やご門徒様が気軽に心地よく訪れ易いようにという願いを込めたリフォームをお願いしました。

大谷派教団では年度の始まりが七月ですから、六月は年度末になります。教区改編が進められる中、七月からは五教区あった九州地域が一教区に合併されます。組もこれまでの中津組が築上組、耶馬渓組と合併し、豊前中津組として発足します。市町村合併と同じように、教区や組が合併されるのです。それは大谷派教団という組織が従来の組織を維持出来なくなって、縮小を余儀なくされたからです。東本願寺が、衰退の一途を辿っていることは、もう何十年も前から問題視されていることで、今さら驚くことではないのですが、いよいよ足元にまでその現象が迫ってくると、なんとも言えない無力感を感じます。まだ住職と結婚もしていないころ、大谷派の僧侶に圧倒的な師事をされていた安田理深先生のお話の中で「すでに死体（しにたい）なんだ」「あまりに大きいから倒れるのに時間がかかっているだけ」「まだなんとか出来そうだと思ってつっかえ棒をしても、ものが大きいからつっかえ棒をした方がつぶされてしまう」とおっしゃったことを覚えています。私も順番で中津組の坊守会長の役を勤めさせて頂いている関係上、合併後の活動について話し合われる会議に参加する機会があります。そういう会議で話し合われるのは、事務的な手続きの変更についてや、組織図の変更の説明です。今に至って組織を盛りかえす起爆剤などありません。そうはいっても、長仁寺は東本願寺の一末寺ですから、知らん顔は出来ません。先の安田先生はこうもおっしゃいました。「倒れるものを倒れないように力を注ぐより、別の所に新しいものを造り出すことが大事だ」。

今の東本願寺に念仏の教えを求めるのは無理かもしれません。私が御縁をいただいた昭和五十五年頃には、京都に居りましたこともあり、いろいろな先生がおられましたし、聞法会も盛んでした。同朋会運動の余波がまだ残っていました。そのころの様子から今はずいぶん様変わりした印象を受けます。ご信心を真剣に求める人が訪ねて行ける場所なり人が見当たりません。念仏のお話が聞かれなくなったのが寂しいという声を聞きます。平成の世で、お念仏の世界は片すみに追いやられ、本山では社会運動に重点が置かれるようになったと感じます。ご信心の話は、人前で話すことも憚れるような雰囲気ですし、愛山護法の精神が僧俗共に薄れてしまいました。しかし、東本願寺が衰退を続けようが、それでお念仏の値打ちが下がってしまうわけではないのです。ご本願は盛んになったり衰退したりしない世界ですから、ご本願に生かされるものが東本願寺と共に衰退するわけにいきません。自分の置かれた場所で許されるなら地道に法灯を灯し続けて参りたいと願っております。

以上のようなことを住職と話していましたら、向こうから御縁がやってきてくださいました。

今月四日、Ｍさんという四十代の女性が聞法に見えました。Ｍさんは、お父さんのお骨を長仁寺の預り壇にお預かりしている関係で、毎年お命日の五月二十五日に妹さんと二人で参って来られます。今年も姉妹お二人で参って見えたときのお話です。本堂に座るととても落ち着くとおっしゃいます。住職の話を聞かれて、もっとこういう話を聞いてみたいとおっしゃいます。それでは、聞法に来ればいいですよ。　毎月二十八日の聞光道はずいぶん長く続いており、長く聴聞されている方の集まりです。Ｍさんがいきなり中に入ったら戸惑われるかもしれません。十一日は大石先生の御書信をはじめ、大峯顕先生、蜂屋賢喜代先生の御著書を輪読する会を開いています。十三日は仏教婦人会定例聞法会があります。まったく一から聞法されるのですから色がついていません。では月のはじめに初心者の会を開こうということになりました。その第一回目が六月四日と決まりました。その日、妹さんはお仕事の都合で来れませんでしたから、Ｍさんがおひとりで参って来て下さいました。Ｍさんはこれまで聞法の御縁は無かったようです。いまどき、聞法したいとお寺に来て下さる方は貴重な方です。これからＭさんがどのように歩んでいかれるか楽しみです。

　続いて十一日、輪読会がありました。大石法夫先生の御書信をはじめ、他の先生方の御著書を数人で輪読します。　昨年の十月から始めて五回目です。大石先生がご存命のころ、何度か御法座に参ってこられた坊守のＨさんから、久しぶりにお手紙を頂きました。そのとき、いっしょに輪読しませんかとお誘いしたところ、車で一時間かかるお寺から参加して下さるようになりました。聞光道に参って来られる田川の慈光寺さん父子も参加されるようになりました。　人数は少なくても、仏法を真剣に求める方々と法に触れる時間を過ごせることが何より有難いと思います。

　住職も私も生きることが不器用で、四苦八苦して参りましたし、家の中は常に波乱に富んでいました。そうした苦難を超えてなんとか生きて来られましたのは、ひとえに教えのお陰であります。これまで頂いたご恩を少しでもお返しして行きたいと思います。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

令和二年六月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜